

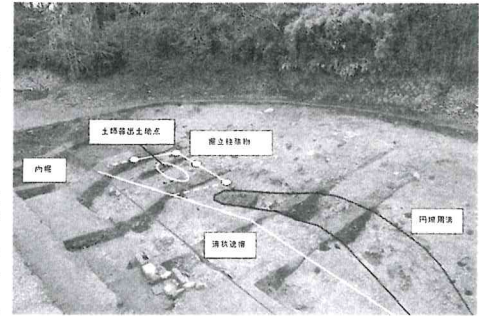
古代から中世 遺構確認



出土した土師器



掘立柱建物跡の柱穴。穴の底に石が詰められている



溝状遺構や掘立柱建物跡(柱穴)、円墳周溝など、時代の違う遺構が重なるように見つかった



円墳周溝から出土した古墳時代中期の土器

延岡市教委

野口遵記念館建設地を調査 古墳時代 円墳周溝も発見

延岡市教育委員会は22日、延岡城内遺跡(第51次)発掘調査の結果を発表した。城山公園北東側を調査。延岡城の内堀の構造を確認したほか、周辺から古代から中世にかけての溝状遺構や掘立柱建物跡(柱穴)、古墳時代の円墳周溝などを発見した。26日に市民向けの現地説明会を開く。

調査地は野口遵記念館建設地内。市教委は昨年11月6日から3月末までの期間、同所での発掘調査を実施した。発掘調査の結果、確認された延岡城の内堀は、幅約12メートル、深さ3メートル以上。絵図では「空堀」として描かれている。堀の城内側(西側)のり面は城山丘陵の斜面の岩盤を利用して

るが、岩盤の形状が複雑に入り組んでいるため、所々を埋めてのり面を整形した形跡が見られるという。一方、内堀の対岸(東側)のり面は、江戸時代は地面の土を掘った素掘りの形状。発掘により石垣が出土したが、昭和初期ごろのものであると思われる。内堀の東側を埋めて築かれていたため、敷地を広げ

るが、岩盤の形状が複雑に入り組んでいるため、所々を埋めてのり面を整形した形跡が見られるという。一方、内堀の対岸(東側)のり面は、江戸時代は地面の土を掘った素掘りの形状。発掘により石垣が出土したが、昭和初期ごろのものであると思われる。内堀の東側を埋めて築かれていたため、敷地を広げ

円墳周溝も発見

るが、岩盤の形状が複雑に入り組んでいるため、所々を埋めてのり面を整形した形跡が見られるという。一方、内堀の対岸(東側)のり面は、江戸時代は地面の土を掘った素掘りの形状。発掘により石垣が出土したが、昭和初期ごろのものであると思われる。内堀の東側を埋めて築かれていたため、敷地を広げ

また、奈良時代から平安時代にかけてのものと思われる溝状遺構や掘立柱建物跡(柱穴)、古墳時代中期の5世紀ごろのものと考えられる円墳の周溝(古墳の周囲を巡る溝)などは、石垣が出土した調査地の南側から出土した。検出された溝状遺構

の幅は約2メートル、深さ約70センチ。内堀が開削される以前にあったとみられる溝で、内堀と同じ南北方向に延びている。遺構東側のり面部分については、内堀の開削によって壊れたとみられる。

掘立柱建物跡では、柱穴とみられる遺構が4カ所確認された。柱間の距離は2・7メートルと2・9メートル。柱穴の直径が大きく、穴の底に石が詰められていることなどから、丈夫な構造の建物だった可能性があるという。

さらに、同建物跡の中央付近からは土師(はじ)器の皿や炭などが集中して出土。これは掘立柱建物建てる前の地鎮祭(さい)して使われたものと推察される。

また、周溝の底面からは古墳時代中期とみられる15個の土器(かめ、つぼ、鉢各1、杯12)が出土した。かめは底に穴が開けられ、杯は重ねて据え置かれた状態で見つかり、古墳の被葬者に対する祭祀儀礼の痕跡とみられるという。

文化課は「絵図に表現された印象とは異なるしつかりとした構造の内堀が確認できた。延岡城築城以前の城山周辺の土地利用の一端が明らかになった」としている。

26日の午前と午後、市民向け現地説明会後に現地説明会

市民向け現地説明会は26日午前10時30分からと、午後1時30分から、野口遵記念館建設予定地の発掘調査地で行う。小雨決行。事前申し込み不要。駐車場は市役所第1・第2駐車場